伊那市立図書館の取り組み
伊那谷の屋根のない博物館の屋根のある広場へ

平　賀　研　也　　（伊那市立伊那図書館 館長）

これからの公共図書館像を求めて

伊那市立図書館は今、“伊那谷の屋根のない博物館の屋根のある広場”となることを目指している。

“伊那谷の屋根のない博物館”とは、伊那市のみならず、同じ生活文化圏である伊那谷地域全体を知のフィールドと考え、地域の人々が仲間と共に、目の前に広がる地域の自然、環境、くらしに学び、懐かしくも新しい未来の生活文化を創造し世界に発信するという「知」をめぐるあり方だ。そして“屋根のある広場”とは、地域の図書館がそうした「知る」行為の起点として、情報と人、人と人がつながる場となりたいということである。そのような公共図書館事業のありようを、地域の人々と共にデザインしたいのだ。

2013年には、このような思いを持って私たちがこの4～5年間にわたって試行錯誤してきた取組みが図らずも注目され、NPO法人知的資源イニシャティブより先進的な図書館的活動に対して贈られるLibrary of the Yearの大賞が授与された[1]。Library of the Year 2013表彰に際し、伊那市立図書館の取組が頂戴した評価は、「図書館という「ハコ」や仕組みに囚われない新鮮な取組み」、「新しい公共空間を創ろうという営み」あるいは「地域資源の創生」、「新しい知るスタイルの提案」という言葉で表現された。

私たちは、伊那市立図書館が現在そうした言葉の通りであるとは思わない。しかし、これらの言葉は、私たちがさまざまなプロジェクトの試行錯誤の中で気づき目指そうとしてきたことを的確に表現しているとも感じている。それは、あくまで「地域の情報資産」にこだわり、本だけでなく「デジタルな情報やメディア」も活用し、「共に知る」プロセスを大事にする「知る」「学ぶ」のありようの愉しさであり、公共図書館が今の時代に地域や地域に暮らす人々のために果たし得る役割の大きな可能性である。そして「これからの公共図書館」のあり方を考える時、私たちの気づきは一つの選択肢、方向性となり得るのではないかと考えている。

そしてまた、私たちの気づきは、実は何も目新しいものではなく、結局のところ、伊那谷という地域において長年にわたって蓄積されてきた地域の「知」や江戸時代以来培われてきた「実学」（実践学）のあり方を今様に再構成しているに過ぎないとも感じる。 そうした知のありようは、信州あるいは近代教育の底流にあるものと親和的なのではないだろうか。 地域の情報拠点としての公共図書館は、時代の要請と人々のくらしや思いが作り上げ、支え続けてきた。これからの公共図書館のあり方を考える時、現在の社会や技術や人の暮らしを踏まえつつ、今一度地域図書館の過去を振り返ることは重要な作業となるだろう。

本稿では、伊那市立図書館のこれまでと今、を省みることで「これからの公共図書館」について考え

を巡らせたい。そのことを通じて、社会のパラダイムが大きく転換し、情報基盤社会を迎えたこの時代に図書館事業を担う私たちは、単に図書館サービス計画（論）の枠内にとどまることなく、今一度、地域で知ること、学ぶことの原点に立ち戻り、地域の生涯学習・社会教育政策・教育政策更には地域政策の枠組みの中に、図書館のビジョンとポジショニングを再構成すべきではないのか、という私たち自身への問題提起としたい。

伊那市立図書館前史

伊那市立図書館は、2006（平成 18）年の市町村合併・新伊那市発足以来、伊那図書館と高遠町図書館という二つの中央館を核として図書館事業を展開している。現在では、伊那図書館の下に東春近、富県、手良、長谷、美篶、西箕輪の６館の公民館図書室（分館）、それぞれが1-2万冊の図書を各地域に提供し、伊那、高遠町の両中央館と併せ、約 45 万冊の書籍を収蔵し、一つの地域図書館システムとして機能している。高遠町図書館は1986（昭和61）年、伊那図書館は1994（平成６）年の開館である。しかし、それまでの間この地域に公共図書館が存在しなかった訳ではない。

江戸時代末期以来、あるいは近代図書館に限ってみても明治 40 年代以来、数々の私立図書館や公立図書館が地域の情報拠点として、さまざまな担い手によって作られ、運営されてきたのだ。歴史を振り返れば、地域の図書館が、時代の思潮や人々の思いと共に盛衰を繰り返し、25-30 年のスパンで“断続”してきたことが明らかになる。

その意味で、私たちが今あたりまえのサービスと認識している公共図書館とて、1970 年代以降の大衆消費社会が規定した図書館の姿であり、決して唯一普遍的なものではないのだ。

現在の図書館が一般的になった80 年代半ばから30 年が経とうとしている。今再び、私たちは社会、技術、人々の暮しの変化を目の当りにし、「これからの図書館」を考えなければいけない時代を迎えている[2]。

伊那図書館と高遠町図書館のこれまで、そして、そこで繰り広げられてきた地域の人々の思いや社会の変化、そしてそれにもかかわらず引き継がれてきたものを概観することで、「これからの公共図書館」を考えるヒントとしたい。

（１）伊那市立高遠町図書館

現高遠町図書館は1986（昭和 61）年開館だが、江戸末期以来これに先立つ5つの文庫と図書館の系譜に連なっており、今も受けつがれている資料と伴に185年に及ぶ歴史を刻んでいる[3]。

１）江戸の図書館

1830（文政 13）年に高遠藩儒官中村元恒と鉾持神社神官井岡良古が足利学校に倣って設立した「鉾持文庫（のちに高遠文庫）」、これを受け継いで1860（万延元）年に開学された高遠藩藩校進徳館に設けられた「進徳館文庫」が江戸期の“図書館”である。1871（明治 4）年の廃藩置県、1873（明治 6）年の蔵書

の筑摩県への返納により、江戸の図書館の幕は降される。しかし、筑摩県から長野県そして長野師範学校（現信州大学教育学部）に引き継がれた蔵書のうち残存した4,279冊が、2002（平成14）年に高遠町へ里帰りし、高遠町に残されていた2,071冊と併せ6,350冊が高遠町図書館に収蔵され、整理・調査が進められた。

進徳館での学は「藩士をして孝悌忠信の道を主とし、儒学の本意を失わず、実学専一に心掛けるように…」（藩主内藤頼直）との理念に則り、儒学にとどまることなく、和算、測量術、砲術さらには洋学などの実践学を重んじた[4]。進徳館やその教授たちの開いた私塾は藩士の子弟のみならず近隣の自立農も受入れ、教養としての学に留まることなく、開田や水利など、地域の自然環境とそこに働きかける暮らしの知恵、価値観を形作ってきた。「高遠の学」は、地域の課題とともにあったといえる。また、一人の落伍も許さない姿勢は「共に学び合う」ことを尊重したという。これらの意味で、「高遠の学」は高遠藩のみならず、農的な暮らしを基盤とし、それを“良きもの”としてきた伊那谷の暮らしに則した知のありようが洗練されたものと言うことができるだろう。また、進徳館で教え、学んだ人々の多くは維新後に教育者となり、そのことを通じてその価値観は信州や近代日本の教育のありように影響を及ぼしている。

２）明治の図書館

進徳館文庫の閉鎖から35年後、1908（明治41）年に町の青年会有志が小学校教員の協力を得て会員・会費制の私立図書館「高遠図書館」を設け、巡回文庫活動を中心とし、武術をはじめとする各種の文化事業を開始した。月一回の例会と年三回の大会では、レコード鑑賞、化学実験、運動会、研究発表、余興と実に多様なプログラムが展開され、また養豚を試験事業として実施したりもしている。当時の資料から、青年たちの知る、働くを巡る愉しみと欲求がいきいきと看て取れる。図書「館」を持たない図書館活動がいかに活発に繰り広げられたことか。

また時を同じくして旧高遠藩士である伊沢修二（東京音楽学校・現東京藝術大学音楽学部創設者）を中心とする在京有志が中心となって「高遠進徳図書館及び美術館」の建設が進められ、1916（大正5）年に開館している。設立趣意書には、高遠の自然環境と幕末の先人の功績を列挙した上で「…当時高遠が信州文叢の淵源を以て目せられしもの実に偶然にあらざるなり、天既に此の美なる山水を付与して偉大なる人物を陶冶す共に人の美を圓生に写し、以てこれを不朽に伝ふるの人無かるべからず…」と記されている。風土と人の成長を不可分のものとして認識し、また、知・徳・体を一つの場で獲得すべしという思いが感じられるではないか。

1920（大正9）年にはこの二つの私立図書館が高遠町に寄付され、合併して「高遠進徳図書館」となった。信州史の基礎文献である『蕗原拾葉』などを編纂者である中村元恒・元起親子の後裔から寄贈され、昭和初期まで継続した。戦時体制となり、図書の購入もできなくなり、戦後も「図書はあっても図書館活動がない」状況が1986（昭和61）年まで続くことになる。

３）「高遠の学」と今

この高遠町図書館の歴史を振り返るとき、今もこの地域の学校が一貫して追求し続けている地域の自

然環境と暮らしに学ぶ姿勢、あるいはまた実践的であり、内発的な気づきを尊重し、共に学ぶ教育の源はここにあると感じる。そして、そうした知のありようは、生きる力や人間力を追求してきたこの20年の教育のあり方にとっても親和的な「学」のあり方ではなかったか。社会教育施設としての地域の公共図書館として、今一度、「知る」「学ぶ」の原点として振り返り、地域の情報資産の豊かさ、世界への入口としての地域の知にもう一度スポットを当てたいと考える。それが、「伊那谷の屋根のない博物館の屋根のある広場」としての図書館像を形にするよすがとなるのではないだろうか。

（２）伊那市立伊那図書館

現伊那図書館は1994（平成６）年開館であり、2014年に開館20周年を迎えた。

しかし、現図書館の開館以前にも私立の公共図書館が存在した。

１）明治の図書館・大正デモクラシー期の図書館

古いものは明治40年前後に設置された各村落の図書館である。昭和の合併（昭和29年）による伊那市発足前の旧村、西春近・手良・美篶・東春近・富県等の村の各村落毎に青年会や学友会（同窓会・父兄会）が小学校や集会施設内に設置したものである。多くは、私立として出発し、大正デモクラシー期（大正中期～昭和初頭）に集積され村役場に移設され、村立図書館となっている[5]。

当時の信州の図書館を巡る状況は極めて興味深い。1929（昭和４年）長野県編纂の『御大禮記念 長野県勢大観』は、統計資料を視覚的にデザインした美しいインフォグラフィックス資料だ。その中に「全国に於ける長野県の地位」という項がある。「長野県の最も特色とする点に三つの大きなものがある」。第一は主力発電事業であり発電総量27万キロワットで全国第一位。第二は蚕糸国としての桑、繭、生糸生産の全国第一位。第三は教育国としての中等教育の普及発達、特に実業教育があげられている。県教育費支出全国第二位、「一般に知識欲が旺盛で」あり、私立図書館数は全国第一位だというのだ。1927（昭和2）年の県内図書館数は公立57館、私立166館、そして蔵書数は合計で325,194冊を数えている。

また、本格的な公共図書館としては、上伊那教育会が1930（昭和 5）年に設立し、財団法人上伊那図書館が運営した上伊那図書館があった[6]。1993（平成15）年に閉館し、建物・蔵書は伊那市に移管された。建物は保存改修され、平成22年からは体験型生涯学習施設である伊那市創造館となっている。

伊那図書館では、この旧図書館の閉架書庫のうち2層を現状保存し、残された旧図書館蔵書や公民館や市民から寄贈を受けた明治から戦前昭和までの本を再整理、登録して“昭和の図書館”として公開している。

伊那谷、そして信州の近代図書館の歴史が私立図書館から始まっていることは実に興味深い。国家主義的教育への収斂という形ではあったものの、それまで流動的だった教育カリキュラムや教科書が漸く整うのと同じ頃、1899（明治32）年の図書館令公布は「図書館」という言葉を一般のものとすると共に、知に対する欲求を体現する格好の装置となったのだろう。

現在、伊那地域の公民館は建て替え時期にかかっており、この５年で３つの公民館が取り壊され、それらの公民館倉庫からも大量の古書籍が出現した。福沢諭吉、渋沢栄一、西田幾多郎、徳富蘇峰、養蚕

や農村経営の実務書、普選読本、実業教育の教科書…、書棚を眺めるだけで、明治から世界大戦までの間の人々の知的興味がどう展開していったのかを俯瞰することができる。丁寧に綴じられた明治30年代からの信濃毎日新聞に人々が次世代のために時代の情報を伝えようとした姿が浮かぶ。そして、地域の人々が、欲する知を、情報を手にするための基盤を自分たちの手で確立しようとした姿がそこにある。

2）戦後の公民館活動と図書館運動

敗戦と共に新しい民主主義の時代がやってきた。1949（昭和24）年の社会教育法施行、昭和25年の図書館法の施行に先立つ1946（昭和21）年から始まった公民館の設置、公民館活動の促進は、伊那谷でも戦前と同じ青年団を核として行われた。1948（昭和23）年には、各村の公民館に地域の書籍が集積され、公民館図書室が続々と作られた。戦時に省みられなかった本が再び脚光を浴び、また、米を背負って新しい本を求めて神田神保町へ向かったという逸話も残されている。

しかし、この新しい図書館運動も短命に終わる。高度成長の直前、昭和の大合併と相前後して厳しさを増した財政的基盤を理由に、多くは再び公民館の書棚や倉庫に眠る古書の山となったのだった。

3）地域文庫活動と市民の図書館

戦後の信州の図書館運動のエポックとしては、叶沢清介の発案により県立長野図書館が1950（昭和25年）にはじめたPTA母親文庫がある。ジェンダーによる情報アクセスの不平等を解消する取組みであり、伊那においては前述の上伊那図書館が拠点となり郡内の活動を促進している。

一方、時代は高度成長へと向かい、日本の図書館は日本図書館協会がまとめた二つのレポート[7]とそれに沿った東京日野市立図書館前川恒雄の実践により、新しい公共図書館像に向けて大きく舵を切る。児童サービス、貸出サービス、地域的網羅性を柱とする図書館の姿は半世紀近く経つ今に続くこととなる。

伊那地域では、この二つの活動は重なり合うことなく、後者の新しい動きが「子どもたちに本を」「ポストの数ほど図書館を」の地域文庫活動となり、母親たちの思いは公民館活動とも融合し展開され、80年代半ばになって市立図書館建設の運動へとつながっていく[8]。

伊那市立図書館のこれまで：知を消費する?

1994（平成6）年に新設された伊那図書館、そして1986（昭和61）年に再開した高遠町図書館はいわゆる「市民の図書館」を目指す時代の申し子だといえる。伊那市立図書館における平成25年度の図書貸出冊数内訳を見れば、人々が図書館でどのような情報を手にしているのか、図書館が地域の人々のどのような知的欲求に応えているのかが推し量れる。

伊那市立図書館は全体としては蔵書数約45万冊の中規模図書館である。年間のべ10万人（実数では年間1万人強）に約50万冊の本を貸出している。その総貸出冊数の約半数46%を児童書が占める。さらにその59%が絵本。また、全体の77%を文学（読み物）と料理、手芸などの暮らしのハウ・ツーもの

（日本図書分類の9 類・5 類・7 類の一部）が占める。社会科学、自然科学、人文科学系の各分類（前記以外の7つの分類）はそれぞれ5%以下、地域図書館にとってのユニークなコレクションである地域資料に至ってはわずか0.7%を占めるに過ぎない。本の貸出利用をみると、12 歳以下の子どもとその親である子育て世代が利用者の 40%を超えるハードユーザーである。こうした傾向は地域と図書館の規模が小さくなるほど顕著なのではないだろうか。

この状況を評すれば、公共図書館は地域の人々に広く開かれ、学びの一つの基本技能としての読書を促す環境と、個人の欲求を満たすための読書の基盤を整えた一方、読書の目的は娯楽もしくはリクリエーションにとどまっていると言えないか。

「もっとたくさん、もっといろいろ、もっとべんりに」に留まらない大きな可能性を現代の図書館は秘めていないだろうか。読書が個人の知識の拡大や個人の日常的なくらしの便利さの獲得に資するだけでなく、それが情報の拡大再生産につながり、新たな価値をコミュニティや公共世界にもたらすほどに活用されたなら素晴らしい。

1970 年代以来の市民の図書館像は大きな成功をもたらした。一方、半世紀が経とうとしている今これを振り返るならば、知る自由を保障し、地域の情報拠点を目指した公共図書館の取組みは、もっと生涯学習の裾野を広げ、奥行きを深め得たのではないかと感じる。1980 年代半ば以降、本来であれば、公共図書館がリードしつつ実現できたかもしれないことが二つある。

1）「情報リテラシー」獲得の機会

1980 年代に入りPCが急速に浸透しはじめた当時、すべての人が自由に文字、数字、画像などを使って情報を編集し伝える（出版する）ことができるDTP（Desk Top Publishing）の時代が到来したと言われた。しかし、それから30 年経っても圧倒的多数の人にとって、PCはワードプロセッシング、表計算、インターネットサーフィンによる受け身の情報検索の道具である。もちろんそれだけでも、カネや時間の視点からすれば大きな効率化を果たしたのではあるが、かつて期待された人間の知的創造力を拡張させる道具としての使われ方にはほど遠い。

たとえば、公共図書館で図書を検索し、探し出せる人ですら思いのほか少ないというのが現実なのだ。公共図書館や生涯学習は、情報を探索、選択、理解し、これを編集して表現し社会参画する力としての「情報リテラシー」を獲得する機会とインセンティブをもっと用意できたはずではなかったか。

2）知的創造への「参画」機会

日本の近代図書館は前述の通り、明治末期、大正デモクラシー期、戦後、高度成長末期と25-30 年おきに盛衰を繰り返してきた。時代の推移や変節もあるが、財政的基盤の持続可能性、あるいは活動としての図書館を担う人的資源の持続可能性の欠缺が大きな要因である。この二つは現在公共図書館が直面している課題でもある。

前述の通り、いずれの時にも図書館という知の基盤作りに地域の人々が参画している。高度成長期の“市民の図書館”もその例外ではなく、子どものための読み聞かせ活動や視覚不自由な人々のための朗読

サービスなどが各地で行われてきた。しかし、30年以上にわたってそれを担った団塊世代前後の人々が世代交代を迎える中、公的サービスの享受者ではなく参画者を私たちは獲得できているだろうか。

公共図書館や生涯学習は、地域の共創と課題解決への参画機会とインセンティブをもっと用意できたはずではなかったか。

伊那市立図書館のこれから：知を育もう

経済的成長拡大と豊かさの限界が見えてきた現代において、アカデミズムと教養主義を柱とし、産業資本主義社会に有為な人的資源を開発することを目指してきた公教育の限界が語られる。これに対するものとして、ひとり一人の内発的な興味に寄り添い、"創造性"を尊重した学びをという主張がいままでもなされてきた。いわゆる"生きる力"や"人間力"を追求する教育もこうした考え方に立つと言えるし、信州教育にとってはそれが長い間にわたって核心的なテーマだったといえないだろうか。

公共図書館や生涯学習もまた同じ問題意識を共有し、特に ICTを活用しつつ、公教育や地域運営ともつながりつつ展開していけないだろうか。ICTイノベーションは、人間が知るプロセスや知を共有するプロセスを大きく変えはじめている。活字の発明（印刷技術）にも匹敵する根本的な変化の可能性がそこにある。

電子情報の激増でこれまでになく情報と人との距離は縮まっている。情報アーカイブや検索技術による知の可視化は個人の知るプロセスをダイナミックに変化させ、迅速かつ大量に、しかも感覚的にそれを行うことができる。さらにデジタルメディアと現実をつないでコミュニケーション行為としての知る、学ぶが常態となってきている。

伊那市立図書館は上述の現状認識の下、これまで長年に亘って地域で培われてきた「地域の自然環境と暮らしに学ぶ」という実践的な"知るスタイル"とも親和的に「屋根のない博物館の屋根のある広場へ」を合言葉にして、新たな公共図書館像を模索し、試行錯誤を続けている。

ここではまず「地域知」に着目する。地域情報とリアルなヒト・モノ・コトをつないだ"実感ある知"の獲得のために、新たな地域資源を創生する人々の活動のための情報基盤と共創の場を整えようと考えている。

そのために、第一に地域の情報基盤の再構築を目指す。本だけでなくデジタルメディアを活用することで、地域知の蓄積→活用→創造→蓄積の循環を地域に構築したい。その基盤はデジタルアーカイブを核とした地域の知の共有地＝デジタル・コモンズである。

第二に、より多くの人々が情報を活用し「地域知」の再創造をめざすために、地域で共に知る場やプログラムを用意し、参加する人々の情報リテラシーをエンパワーする支援をしたい。

かような取組みは、自然と図書館事業にとどまらず、広く地域の学校教育、産業、地域づくりなどとも連動したものにならざるを得ない。図書館というハコや仕組みの枠にとらわれず、公共図書館の新しい事業ドメイン（領域）を確立し、地域のさまざまなプレイヤーと共に「新しい公共空間」を創造したいものだ。

地域情報資産を活用し、共に知り、創る場である「高遠ぶらりプロジェクト」、伊那谷の多様な主体とともに構築する地域知の共有地「伊那谷デジタルコモンズ」、地域の自然環境とそれに働きかけてきた暮らしのヒト・モノ・コトを情報化する「伊那谷自然環境ライブラリー」、本と「図書館地域通貨りぶら」がつなぐ、人・まち・図書館。地域に生まれ、生きてきた人々の”あの時"を語り合いアーカイブする「伊那谷自由雑学大学」、地域の"知る"の過去にタイムスリップできる「昭和の図書館」、町の人々と共に再興に取り組む「高遠本の街」など、図書館が地域の人々と共に展開するこれらのプログラムすべて…る私たちの思いでもある[9]。

この四半世紀、私たちは社会の新しい地平に向かって険しい峠を登っている。そんな今、地域の図書館は、地域の情報のハブとして「情報と情報、情報と人、人と人をつなぎなおす」サポートを通じて、地域の人々の暮らしと社会のイノベーションに寄与できるはずだ。

これまでのように、たくさんの多様な情報を提供することを通じて、個々人が多くの知識を獲得し、それぞれの暮らしを豊かにする基盤を整えるだけでなく、これからは、見、聞き、触れ、関わりながら現実に働きかけることのできる“実感”を伴なった「知」を獲得し、地域や社会の課題に生き生きと取り組む人々に寄与できる場とプロセスを用意したいものだ。

そのような「知」を巡る地域のムーヴメントとしての図書館像をカタチにできないだろうか。地域の図書館はそれを担うのに最もふさわしい公共空間のはずだ。

末尾になるが、信州大学附属図書館との連携もそのようなものとして発展することを期待している[10]。

---

1 NPO法人「知的資源イニシャティブ」Library of the Year 2013
http://www.iri-net.org/loy/loy2013.html

2 なぜ図書館が大きな転換期にあると考えるかについては本稿では触れない。以下の拙稿などを参考にされたい。「知のエンパワーメントは“地域”から」平賀研也（『日本生涯教育学会年報』第35号 2014）

3 『高遠町の図書館の歩み―過去は未来に栄光をもたらす』森下正夫（高遠町図書館, 2007年）

4 『「高遠の学」と進徳館の教育』岡部善治郎（高遠町図書館資料叢書1994年）

5 『東春近村誌』（1972）,『みすず―その成立と発展』（1972）,『手良誌』（2014）など

6 『財団法人上伊那図書館三十周年記念誌』（上伊那図書館, 1980）,『上伊那図書館創立五十周年記念誌』（上伊那図書館, 1980）,『上伊那図書館閉館記念誌』（上伊那図書館, 2003）

7 『中小都市における公共図書館の運営』（日本図書館協会, 1963）,『市民の図書館』（日本図書館協会, 1970）

8 『としょかんができた！―伊那市における図書館運動の歩み』（伊那図書館を考える会, 1994）

9 本稿ではこれらの取組みの一つ一つについて詳述しないが、以下を参照されたい：
「地域の自然・環境・くらしに学び「懐かしい未来」の生活文化を創造する―「伊那谷自然環境ライブラリー」・変革期の事業企画とは？」」（『社会教育』2011年10月号）
「公募図書館長がプロデュースする伊那市立図書館― "伊那谷の屋根のない博物館"の"屋根のある広場

"へ—」(『明日をひらく図書館—長野の実践と挑戦』青弓社, 2013年)

「幻の「伊那町南停留所」—デジタルコモンズがひらく新しい地域知の世界—」(『伊那路』2013 年 4 月号)

「地域に立ち、学びを"知の体系"から解き放つ— "地域の知のコモンズ（共有地）"の構築とその活用の可能性」(『社会教育』2014年11月号)

[10] 信州大学と伊那市の連携協定（平成 17 年～）に基づき、信州大学附属図書館全館との無償相互貸借及び信州大学附属図書館農学部図書館と伊那図書館における教職員・学生向けの資料返却・貸出サービス提供（2012 年 9 月～）を実施している。また、伊那谷地域における国土交通省中部地方整備曲天竜川上流河川事務所プロジェクト「人と暮らしの伊那谷遺産プロジェクト」においても協働関係を築いている。